



IIMAの目 公益財団法人 国際通貨研究所

2022年3月10日

中東とロシアの経済関係～期待される中東産油国の役割

公益財団法人 国際通貨研究所
開発経済調査部 主任研究員 九門康之

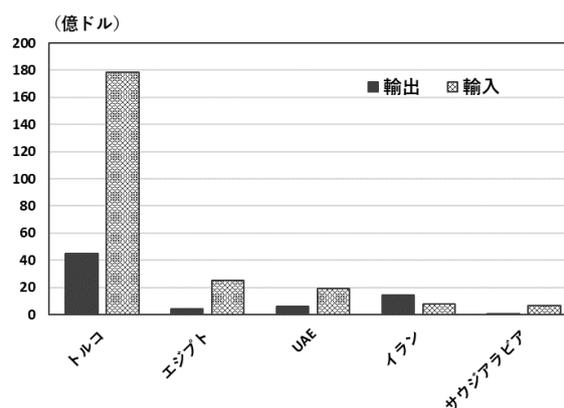
中東主要国がロシアの動きを注視している。両者の経済関係の関係を、貿易、エネルギーの側面から概観する。

中東諸国とロシアの貿易額は小さい。これは、地理的な近さを考えると意外である。対ロシア貿易を輸出と輸入を合計した貿易総額でみると、トルコはロシアから天然ガスを輸入しているためロシアとの貿易総額が223億ドルでロシア比率は5.7%とやや大きい。エジプトは総額29億ドルで3.4%と小さく、政治的にロシア寄りといわれるイランでも22億ドルで2.6%に留まる。湾岸産油国のアラブ首長国(UAE)、サウジアラビアではさらに小さく、UAEで貿易総額26億ドル、ロシア比率0.5%、サウジアラビアで7億ドル、0.2%となっている(図表1)。

図表1：中東諸国と対ロシア貿易、2020年

	輸出	輸入	合計	ロシア比率
トルコ	45.1	178.3	223.4	5.7%
エジプト	4.1	25.2	29.3	3.4%
UAE	6.2	19.4	25.6	0.5%
イラン	14.2	8.0	22.2	2.6%
サウジアラビア	0.5	6.9	7.4	0.2%

(億ドル)



(資料) 世銀、IMF データより国際通貨研究所作成

他方、エネルギーの分野では、中東諸国とロシアの関係は密接である。2017年から、ロシアは非加盟国ではあるがOPECと連携している。2020年に意見が対立する局面があったものの、その後はOPECプラスの一員として生産量の調整を行っている。ロシア

の石油生産規模は大きく、サウジアラビアと肩を並べる有数の産油国である（図表2）。両者は、原油価格の安定が財政の安定につながるという点で利害を共有している。

歴史を振り返ると、ロシア（旧ソ連）が中東での存在感を拡大した時期があった。1960～1970年、旧ソ連がエジプトのアスワンハイダム建設を援助した時期である。旧ソ連のエジプト進出は、米国と同盟するイスラエルにとり脅威となった。そのため1978年、米国はエジプトとイスラエルを仲介して両国の和平を実現し、巻き返しをはかった。その後、エジプトは米国寄りとなり、旧ソ連の中東でのプレゼンスは低下した。

現在、ロシアのサウジアラビアをはじめとする中東産油国との関係が重みを増している。両者は、経済的な利害を共有していることに加え、ロシアはOPECを通じた人脈を持っている。サウジアラビアは、ロシアとウクライナの仲裁を申し出ており、今後、中東産油国が果たす役割が期待される。

図表2：石油生産量比較、2021年

	生産量 (万b/d)	比率
米国	1,914	20%
ロシア	1,188	12%
サウジアラビア	1,000	10%
OPEC合計	2,792	29%
世界合計	9,782	100%

(資料) OPEC データより国際通貨研究所作成

以 上

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくごお願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。